

14. 小野土居

岡豊小蓮小山田 土佐山 52.7×42.8

15. 小野古城

岡豊小蓮宮前 土佐山 52.8×42.6

小野土居は国道32号線北、標高15m内外の山麓に所在したといわれる土居で、現状は宅地や水田で消滅している。小野民部丞の屋敷で地検帳によれば1反6畝18分とある。給地を多くもった元親の有力家臣であった。

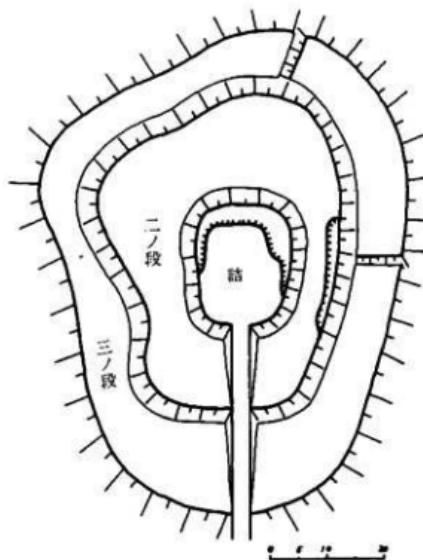
小野古城は標高36mの小丘上で、国道32号線にはほとんど接し、前方は岡豊平野が開け、後方には小野土居、奥谷から北の山系に連なっている。

詰の平坦部には小野神社があり、山麓から詰まで石段が築かれている。詰とされている社地は東西13m、南北17mの方形に近い平坦面で、土壘が西中央部から北へ10m、そこで折れて東に8mさらに南に曲って6mのコの字形に存在する。特に神社の裏側となる北辺の東西方向の土壘は切削されれば垂直な法をもち褐色の地山層がそのまま露呈している。詰と土壘頂部のレベル差は3~3.5mで、土壘上面は西北コーナー部で2m、北は4m、北東隅部は4.5mとまちまちであり、社地構築のための堀削部も若干考えられる壘状地形である。

詰とレベル差2~2.5mの下方に二の段がある。幅は西方が7m、北は16m、東は8.5mとまちまちであり東方に僅かな壘状地形もある。南面には鳥居がたつ。

5m下方には三の段がある。幅は南が16mと広いが西から北へは5.5~6mとなり、北東隅で2.5mの段差をもって高くなり幅も9mと広がって南へ41m続く。ここで1.5m低くなり、51m南へのびて右段に接する。三の段については後世の整地も考えられる。

小野民部丞の城で式内社小野神社がある。南北朝時代に小野彦衛門が築城し、南朝方と戦った城ではないかと思う。「地検帳」では小野神社の所有地である。小野民部丞はその後裔であろうか。



小野古城



上一小野土居 下一小野古城



土居，古城周边



土居周辺



古城詰東側土壘（南より）



古城詰東端土壘

16. 千頭屋敷

岡豊小蓮宮前 土佐山 53.0×42.2

17. 窪添屋敷

岡豊小蓮美泥 土佐山 53.5×42.2

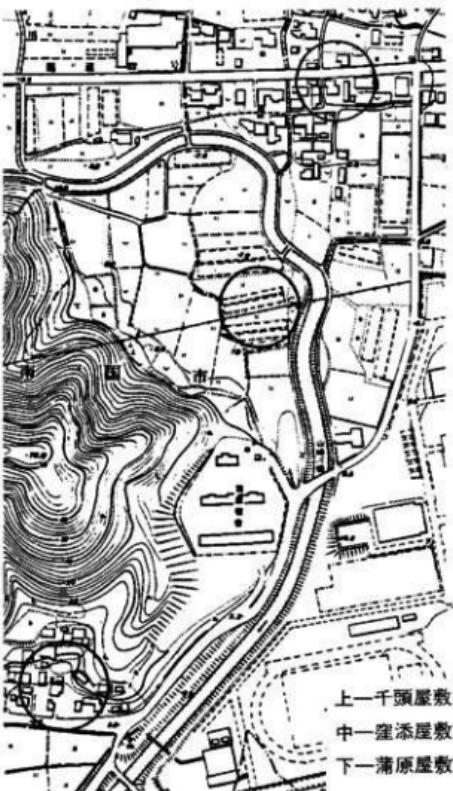
18. 蒲原屋敷

岡豊蒲原 土佐山 53.5×41.2

国道32号線の南に散在する屋敷跡で、標高8~10mの平地である。最近の開発や民家により遺構など確認できない消滅した屋敷である。

千頭屋敷（千頭金千代）はチカミ・セントウとも言い、千頭、仙頭、専当とも書いた。家系の詳細は不明であるが元親の有力な家臣であった。天正検地当時は千頭土居ヤシキとして給地である。「地検帳」では、東の土居1反9畝14分、中ノ土居1反11分、西ノ土居1反3畝4分である。

窪添屋敷は窪添与十郎重吉・千頭掃部の土居で『土佐国古城略史』に「城主窪添与十郎重吉。世系相承くる所詳かならず。土佐故事曰く、重吉初め泰元親に仕え、豊後の役戦死す。その子藤兵衛を辞し一宮に居る。」とある。与十郎は戸次川で戦死したといわれ、その後藤兵衛は元親に対して不満の心を持ち、元親に仕えることをやめて一宮村に隠居したと伝えられている。雪溪寺の戸次川合戦々死者の大位牌に与十郎の名がないところをみると、ここに何か問題があったのではないかと思われる。窪添城及び給地を元親に取り上げられ一宮村に替地を給せられて「ヨナ本」に転任したものと思われる。その後に千頭掃部が居住したと思われる。



天正16年1月検地の給地は一宮村に1町2反30代余布師田村に40代余とあり、屋敷は

ヨナ本面
一、世代 出一代半
中ヤシキ

一宮村七石
窪添与十郎給

となり、天正16年10月検地の長宗我部地検帳には

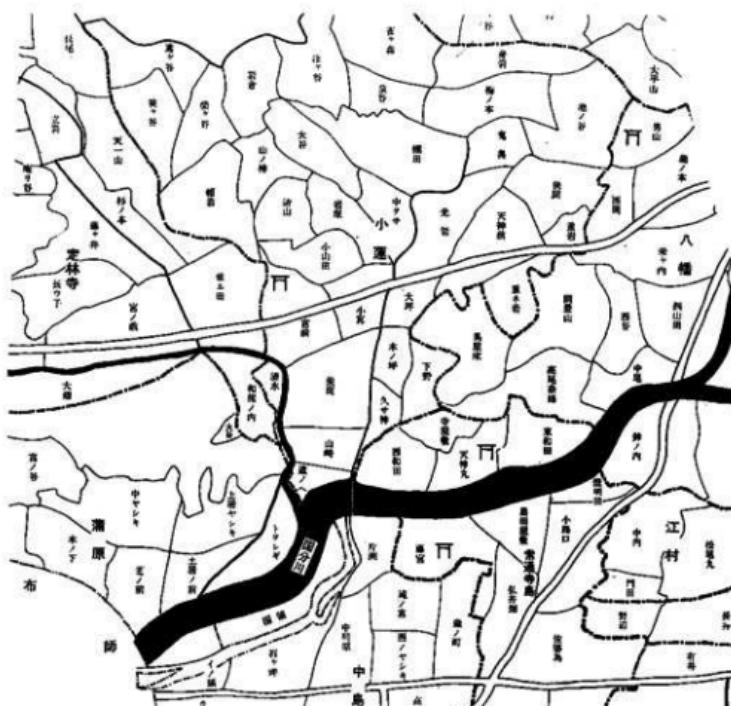
ヲホソヘ
一、壱反 出ト五代三歩
中ヤシキ

小野村開墾地
千穎金千代丸給

となっている。

蒲原土居屋敷は蒲原又四郎吉序の土居である。蒲原氏は長宗我部第16代文兼の6男恒安が分家して、蒲原土居屋敷に居住して蒲原氏を名乗った。文明年間の頃である。地検帳には蒲原又四郎吉序が蒲原の耕地の大部分を領有し城主としてこの土居に居住していた。

天正14年の豊後戸次川合戦では、城主又四郎吉序の父序貞と叔父信安、恒信の3人が戦死している。家来も多く戦死したことであろう。





千頭屋敷周辺（南より）



窟添屋敷周辺（南より）



蒲原屋敷周辺（南より）

19. 石谷土居

岡豊小蓮天神前 土佐山 55.0×45.5

20. 下野土居

岡豊小蓮下野 土佐山 55.8×45.1

石谷土居は岡豊城跡の北麓32号線を隔てた山麓に、下野土居は岡豊城跡西麓の谷に所在した土居である。現状は畠地や宅地となり消滅している。

石谷土居は石谷兵部少輔の土居である。元親は永禄6年、25才の時、石谷兵部少輔の妹を妻にした。兵部少輔は明智光秀の滅亡の時期に京都の乱をさけて元親を頼って土佐にきたので元親は蓮如寺光岩に東、西の大きな土居を与えた。次の年の天正11年7月元親の妻が38歳で死亡したが、兵部少輔の娘と元親の長男信親が結婚したので两家の関係は深く結ばれていた。

天正14年九州の戸次川合戦で信親と共に戦死した。



上一石谷土居 下一下野土居

下野土居の所在する下野村は12筆からなる集落で、3代のサンハク（山崩）1筆のみで、他の11筆はヤシキである。総面積6反45代3分の小集落である。家数は11戸である。この村は久家喜兵衛と千頭弥兵衛の2人の給地で、それぞれ土居ヤシキに住居し、外に澤善兵衛が1人ヤシキを持っている。この集落は岡豊城の砦としての役目をもち、西方からの攻撃に対する備えであろう。

天正検地の時点では下野の任務は不用になったとみて、久家喜兵衛は桑名丹後守の屋敷に移っている。



石谷土居周辺（南より）



下野土居周辺（西より）

21. 谷 土 居

岡豊小蓮重岩 土佐山 31.5×5.4

国道32号線沿い岡豊八幡宮の南麓で、標高23m前後的小谷間である。現状は山林や水田であり、遺構などはなく消滅の土居である。

谷忠兵衛の土居である。永禄3年には元親が高知市方面に進出しあじめた。忠兵衛は土佐神社の神職であったが弟非有と共に元親に仕えた。忠兵衛は智略にすぐれ戦功も多かった。桑名弥次兵衛と共に中村城代になって土佐西部の軍事、政治につくした。慶長5年11月7日中村で病死、墓は中村裁判所の庭にある。

忠兵衛の子彦十郎は戸次川合戦で戦死したので、その弟加兵衛が家をついた。谷土居の西隣には蓮如寺があって鶴川道標が住居していた。



谷土居周辺（南より）

22. 岡 豊 城

岡豊八幡岡豊山 馬屋床 土佐山田 33.2×3.6

長宗我部氏の城として著名であり、昭和30年には県指定の史跡となっている。城跡は標高97mの詰、69mの厩床、38mの家老屋敷からなっている。

詰は東西35m、南北15mの平坦面で、詰の東部に1.5m低い面が所在するがその機能の判断は困難である。

詰の東下方3m部分には二の段がある。東端がやや尖った卵状地形で長径45m、最大幅部で20mの規模で周囲は土塁によって囲まれている。東南から東斜面は急崖な自然地形のままである。西端部には3.8m（南北）×2.6m（東西）の自然石の石積み井戸がある。

詰の西下方には南北にはしる狭長な三の段、四の段がある。三の段は標高94mで、詰とは約70度の急峻な傾斜角に削られている。幅7～8mで南北50m、南はやや広くなり中央よりやや北寄りに僅かに突出した土塁によって南北両郭に別れ、西辺には土塁がふちどっている。またこの段より詰の東南下方に続く狭長な腰郭があり、それより南斜面は崖状斜面を呈している。

四の段は標高90mで北がやや高い。三の段とのレベル差は北部で4m、南部で5m、斜面は本城郭で最も急峻で80度をこえている。南北は70m、幅は北部で15m、南部で20mが計測でき、中央部北よりのくびれで南北二郭に分けることもできる。南端と中央よりやや北寄りに通路があり、南端には高さ2m、基底幅4m、上辺幅3mの土塁と、西と南に出口がある。中央北よりの通路は幅2m前後であり、北に4m余り、西に2m余りの高さをもつ土塁がくい違いに配置されている。

四の段の北に幅2.5mの空堀があり、その前方40mの範囲内に尾根を削切った3～4条の防禦施設とその前方30mにわたって3重の堀切もある。最内側は深さ3m、底幅6m、堀の勾配は40度である。外側にゆくにつれ勾配は急となり基底幅も短くなる。

出丸に厩床がある。郭の長さは30m、幅17mの卵形で、周囲は空堀と崖である。北西部には二重の空堀があり、特に内側の堀は底幅3m、高さ4m、傾斜角50度と深く急峻である。

詰と厩床跡間には、鞍部から南方に2条の堀切のあとがみうけられる。

詰より南下する尾根の先端に家老屋敷とよばれる分離郭がある。東西20m、南北15mで南北は比高30mで急傾斜のまま国分川に至っている。

※東北部の防禦施設に二の段外側の基部に沿って短少な空堀があり、その前方に方形と半円状の土塁があった（安岡源一）。二の段基部より70m東北に深さ1m、長さ10mの崩れた空堀跡も存在した（島田豊寿）。なお南国市実施した西斜面の微地形測量によっ

で、比較的ゆるい西斜面にはV又は一状の畠型阻障が確認された。(参考「南国市史」『岡豊城』『日本城郭大系』)

本城は14世紀から16世紀にかけて長宗我部氏の居城であり特に、兼序、国親、元親は有名である。長宗我部氏は、秦の始皇帝から出ているといわれ、応神天皇の時帰化し後、秦の姓を名乗るようになった。秦能俊が鎌倉時代のはじめ地頭として土佐に着任、子孫が代々長岡郡宗部郷に居ったので姓を長宗我部と改めた。第19代兼序は本山、大平、吉良の諸氏に攻められ大敗した。その時5才の長男千雄丸は家来の近藤某氏にともなわれ城を出て幡多庄中村の一条氏のもとにのがれた。のちの国親である。岡豊城は一時城主を失ったが、永正15年(1518)千雄丸は一条房家から信濃守国親と命名され、房家の計らいで岡豊に帰城した。国親は吉田城主周孝ともすび天文16年(1547)大津城を攻め、天文18年に山田の山田元義を降し、ついで附近の諸豪族を従えた。永禄3年(1560)に本山氏と戦ったが不幸病にたおれた。元親は父の遺志をつぎ、永禄7年本山城を落し、その後安芸、蓮池と次第に勢をのばし天正13年(1585)四国を平定するが、豊臣秀吉の四国征討に敗れて土佐一国を領することとなった。天正16年(1588)の冬元親は城を大高坂に移し、岡豊城は廢城となつた。

元親の山下上居は岡豊山東麓(今の岡豊保育所運動場を含む谷)の谷間に清山寺ヤシキがある。ここが長宗我部氏代々の居住地と思われるが元親が土佐を平定した時点で屋敷の南隣の山上に拡張したものであろう。(田中芭翁氏談)

元親の土居の南隣に、弓場、馬場があった。『地検帳』によると、御弓場4反4畝10分、馬場4畝13分、御弓場1反12分、笠懸馬場1反4畝24分あり、この附近は元親の武芸の中心地であった。

又岡豊山北麓に長宗我部先祖の墓所がありその西隣に「信親の墓」といわれる卵塔がある。尚香川五郎次郎親和のヤシキ跡について『地検帳』に

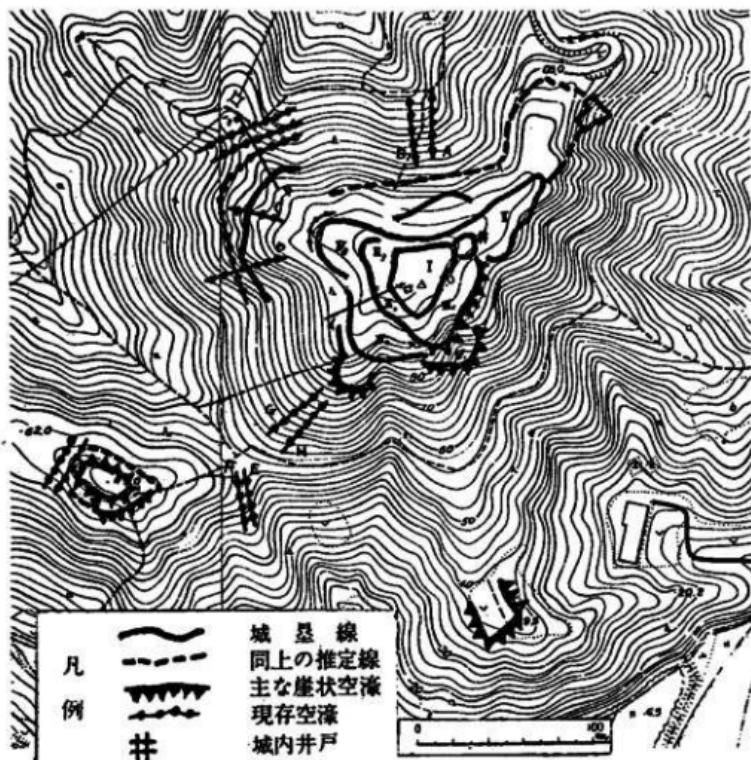
東ノノ
一、宅反卅五代 上ヤシキ 東小野御土居

同じノ南 同 並種御作
一、廿代 十八代 西村源左衛門給 となつてゐる。

親和は元親の二男に生れ13才の時讃岐国大霧城主香川信景の養子となり香川五郎次郎親和と名乗った。元親の讃岐征伐に活躍したが天正13年7月元親が豊臣秀吉に降つたので香川家は改易となり、親和は一時人質として郡山に居たがのち岡豊に帰り東小野に居住した。天正14年12月兄信親が戸次川で戦死し、長宗我部家に世継問題が起つた。二男親和が当然世継となるべきだが、その話もなく月日は過ぎ親和は心労のため病氣となつた。天正16年元親

は4男盛親を世継と定めた。これに対し、吉良親実（元親の甥）、比江山親興（元親の従弟）等多くの反対があったが、元親は怒りこれらの人々に切腹を命じ又打殺した。このことから親和は一段と病状が重くなり翌年8月死去したといわれる。元親は世継問題で親和を良く思っていなかったので、死後もその惜しみはとけず、長宗我部代々の墓所に葬ることを許さなかつた。親和の後見人として長く世話をしてきた吉良五郎兵衛は仕方なく東谷庵に葬った。

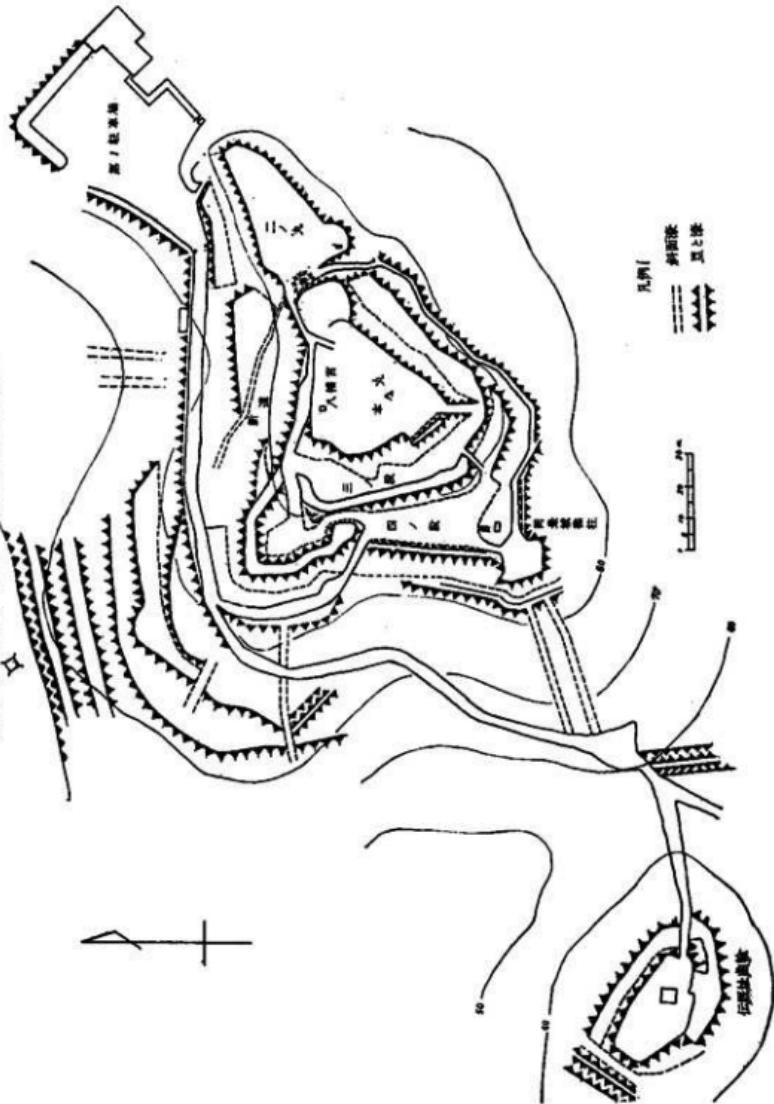
市ヤシキについては、岡豊城の東隣の平地に、東の新町市ヤシキ38軒、西の新町市ヤシキ34軒、その上に東側に国分の古市29軒があり、合計101軒の家が軒を並べて大きな市町を形成している。この市ヤシキは算所姓の人々が多く強い勢力を持っている。算所算衛門はその最有力者で、国分川の川岸に住居し、運輸、商業等に活躍したことがうかがえる。昔の道路は現在残っている。



岡 豊 城 要 図



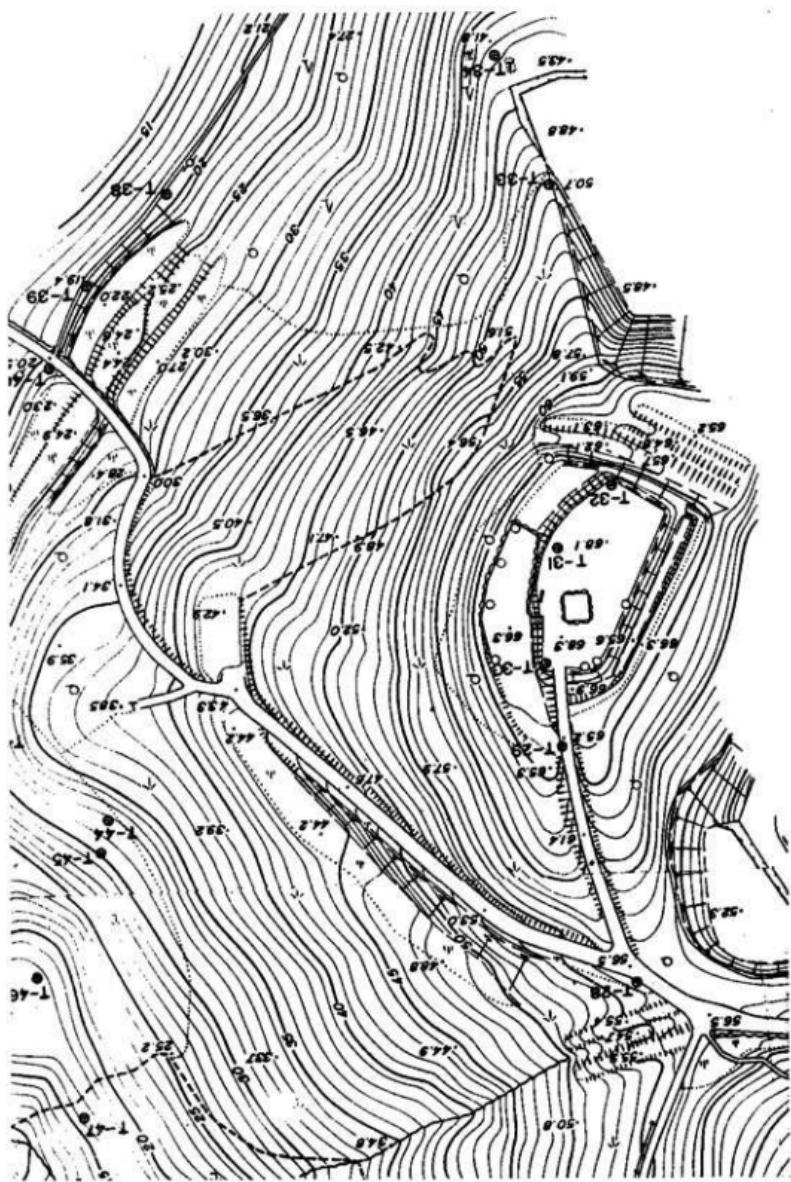
岡豊城実測図（高知高専測量同好会作成）



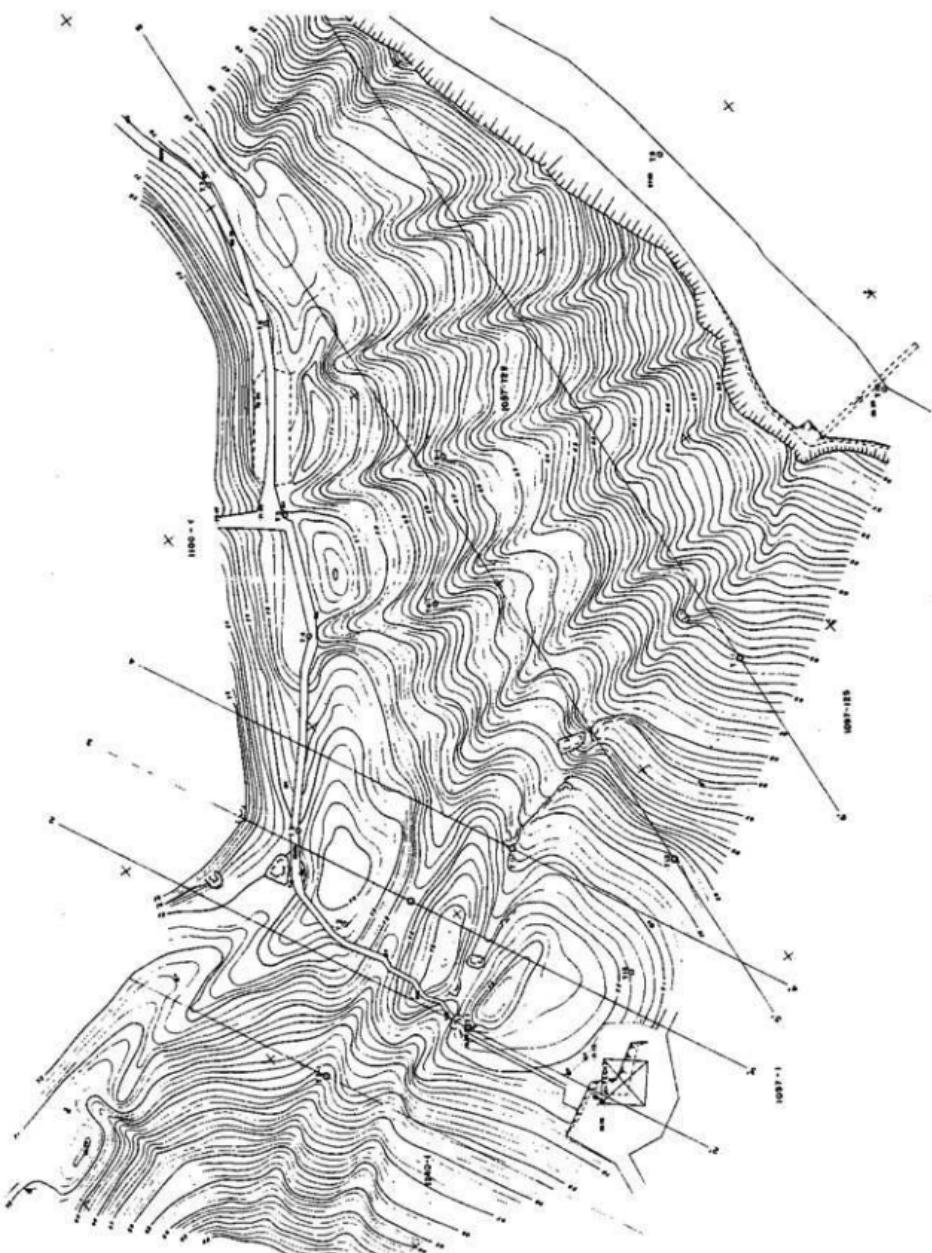
岡豊城実測図（高知高専測量同好会作成）



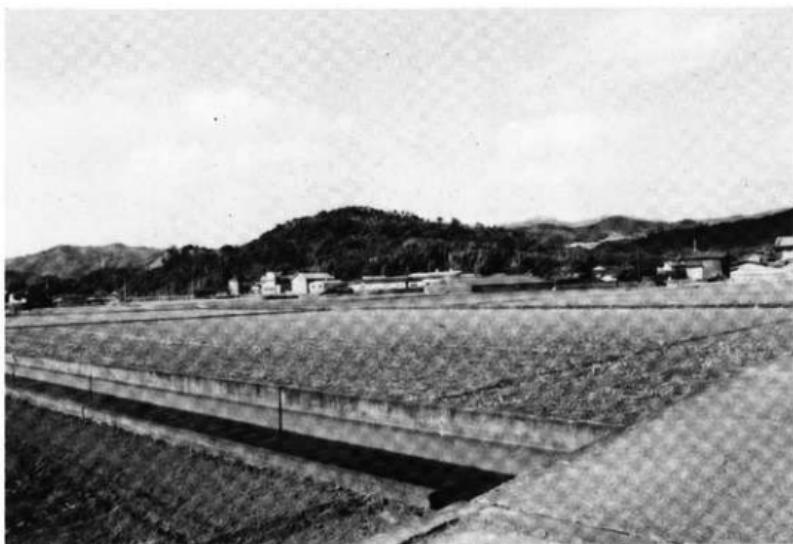
詰周辺



馬屋床周辺



西斜面



岡豊山全景（南東より）



城跡全景（南より）



城跡全景（南西より）



城跡全景（西より）



詰 (南より)



二ノ段 (東より)



二ノ丸井戸跡



三ノ段土壘跡（南東より）



四ノ段土塁（南より）



腰床（西より）

23. 桑名屋敷

常通寺島東和田 土佐山 57.6×46.3

24. 中内土居

中島島田 高知 43.7×56.6

25. 中島土居

中島高木 高知 44.6×57.8

桑名屋敷は岡豊城東麓の標高6.3m内外の谷間に所在し、現状は畠地及び宅地である。

中内、中島土居は、土佐大津駅北東1kmの標高3~4mの平地で畠や民家となっている。ともに消滅し遺構などは存在しない。

桑名上居は桑名丹後守（兄）、桑名藤藏人（弟）のものとして有名である。桑名氏は長宗我部17代元門が武者修行の途中家来になったといわれ、長宗我部氏の三家老として中内・久武とともに功績のあった家柄であり、桑名兄弟の時代になって有名になった。兄丹後守は功によって奈半利城主、甲浦城主になったので、この屋敷は下野村に土居をもつ久家喜兵衛が留守を守っている。



弟桑名藤藏人は、元親の弟親貞が中村城代をしていたが、天正4年に36才で死亡したので城代に任せられた。藤藏人も4年後の天正8年に死亡したので、その子の弥次兵衛が中村城代を引継いだので屋敷は藤九郎が守った。

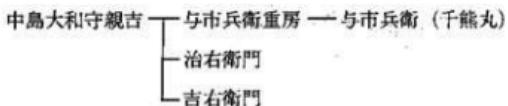
弥次兵衛は藤堂高虎の家来になっていたが、元和元年大阪夏の陣で戦死した。

中内土居は富崎村富崎に所在したので、富崎土居とも言った。

中内氏は長宗我部氏の家来の久武、桑名・中内の三家老の1人で特に有力な重臣であった。この土居は岡豊城の西南の守りとし中島城とともに外敵にあたる重要な拠点であった。城主中内藤左衛門は戦功があり老分になった。永正6年(1509)に長宗我部第19代兼序が岡豊城落城と

もに戦死した合戦では、この中島土居は3,000人の敵に攻められて焼打にあい、激しい戦がおこなわれたと言われこの附近には「上塚」や「五輪塔」も多い。

中島土居は中島大和守親吉の土居である。中島氏は長宗我部第6代満幸の子が分家して中島に住居したので中島氏を名乗った。第20代国親、第21代元親の時代（16世紀後半）に中島大和守親吉があり、度々戦功を立てて有名になった。のちに秦泉寺城主となり、そこで死亡した。その子与市兵衛重房は讃岐引田合戦で天正11年4月に戦死したので、その子与市兵衛が家をついだ。



天正14年12月の戸次川で大敗北をした元親は20名の家来に守られて退却中に数百人の盗賊団におそわれた。与市兵衛は賊の中へ切りこんで賊の大将を切り倒したので、賊は退散し元親は無事日振島へ逃げのびることができた。時に与市兵衛は16才の若年であった。与市兵衛は筆が上手で天正検地の筆者になっている。大津村下分に1反15代の上居屋敷をもっている。晩年山内藩に仕えたがまもなく病死した。

中島土居は昔は大規模であったが、縮少せられて、四方に堀をめぐらした小形の土居やしきになっている。



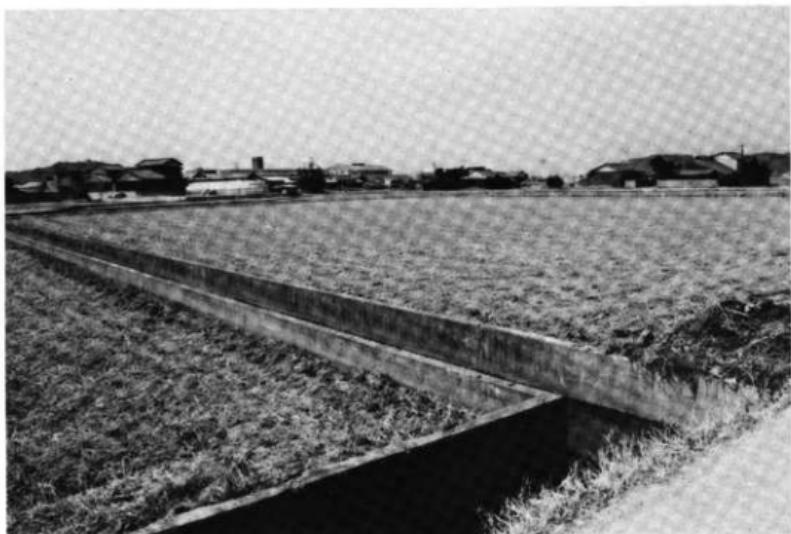
桑名屋敷



上—中島土居，下—中内土居



桑名屋敷周辺



中内土居周辺（北東より）



中島土居周辺（北より）

26. 廣井土居城

廿枝中屋敷 土佐山田 34.5×6.7

国分寺南700m 国分川の南で、標高9m 前後の平地で、現在は園芸団地となっている。昭和47年頃に消滅した。「中屋敷」「馬場」のホノギがあり、南西1kmには吉田土居城がある。

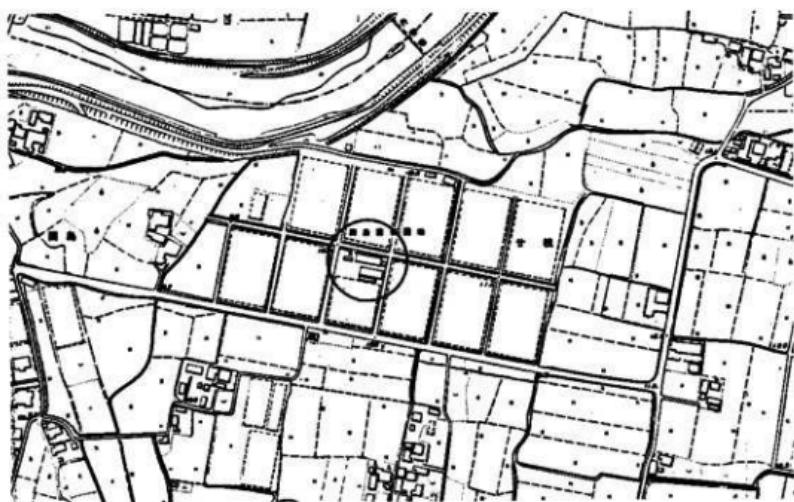
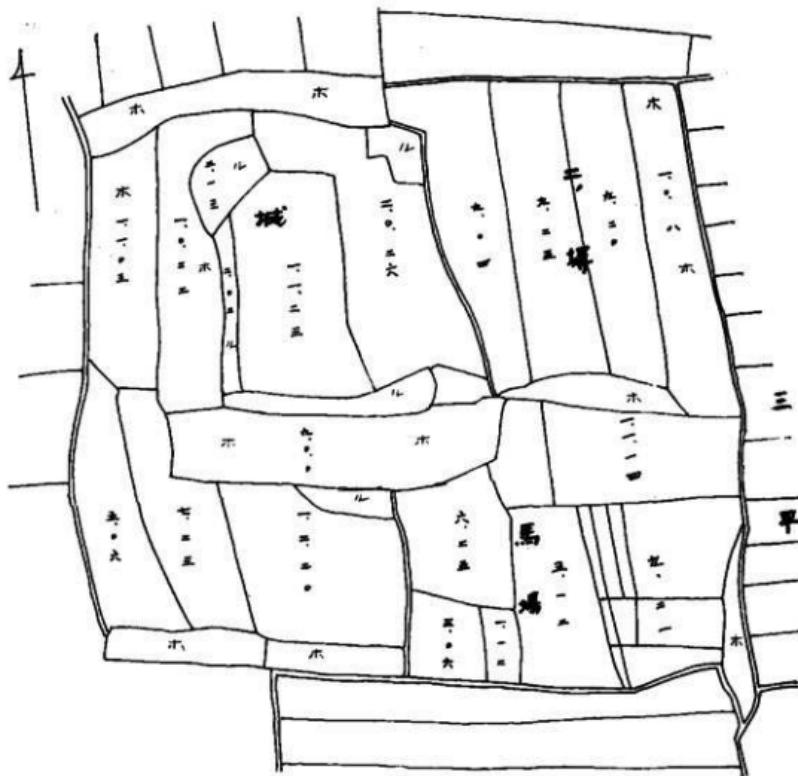
主要居城者は廣井右衛門尉と考えられる。廣井氏は南北朝時代に廣井右衛門尉が武家方に属して、岡豊山東坂本で長宗我部一族と戦っている。廣井城は吉田城と共に岡豊城の外郭防衛の拠点であった。

『廿枝郷南地検帳』によれば、廣井城は集計で1町4反、墨濠地積を加えると1町6反位あり、平城式居館である。

『土佐州都志』に「城跡相伝昔弘井權進者之所居」と記されている。

『地検帳』に古市・市ノ前があり古市は19筆よりなり、ここに市場集落があった。この市町は国分川南岸にあり廣井氏の城下市と思われる。現在も古市・北古市・新市の小字が残っている。







土居周辺（開発前）



土居周辺（開発前）



土居周辺（開発前）

27. 吉田土居城（吉田城）

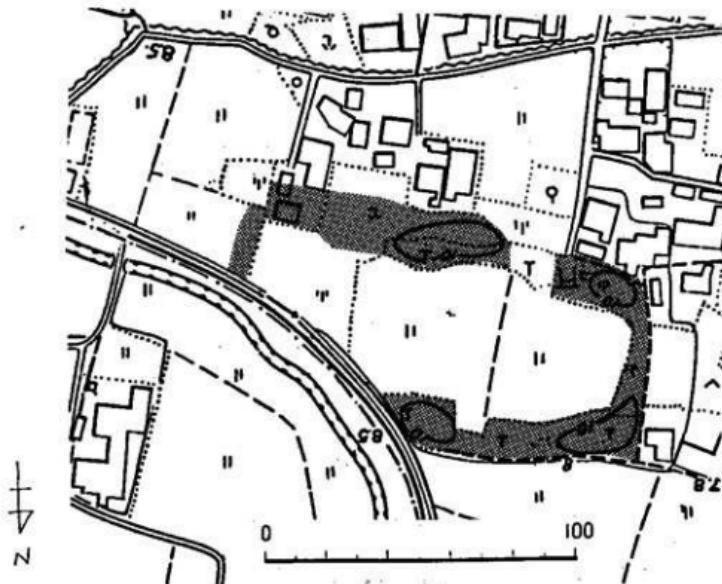
吉田二ノ堀 土佐山田 36.1×3.1

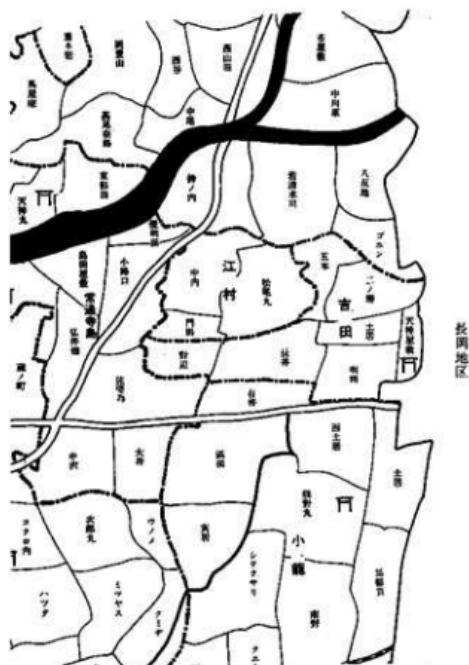
岡豊城跡の南東1km、標高8m前後の平地で、水田や民家が建つ、東西90m、南北50mの「詰屋敷」とされる水田は、北東部を流れる川の部分を除き土塁によって囲まれている。土塁の高さは一定しないが1.5～2mである。

東方には「吉田屋敷」、東南部に「東土居」、南には「馬場」「弓場」などの地名は残存するが、すべて水田や宅地でそれを伝える遺構はない。東方1キロには廣井城、南500mには小籠土居、北西1kmには岡豊城、北西1.3kmには谷土居などがある。

吉田次郎左衛門の上居である。吉田氏は1330年頃足利尊氏に属して功があり、地頭として長岡郡江村郷で城を築き14ヶ村を領して吉田に居城して吉田氏を名乗った。建武2年4月長宗我部信能、廣井右衛門尉等と共に武家方の細川頸氏に属して八幡山東坂本で南朝方と戦った。それから12代を経ると共に勢力が衰えていた。周孝の代になり、周孝は智謀、武勇にすぐれて長宗我部国親の妹を妻として国親の片腕となって活躍した。

二ノ堀内には地検帳当時の吉田ヤシキ、二ノ坪ヤシキ、御西ヤシキ、西ノ土居がある。南に隣接した「土居」には地検帳の東土居がある。





長岡地図

二四







北側土壘全景（南西より）



南側土壘（北西より）

28. 小籠土居（江村土居）小籠西土居 後免 2.5×36.0

土佐電鉄小籠通り北方1kmの標高6.5m内外の平地水田である。東西100m、南北100m部分と推定されるが遺構などはなく消滅した土居である。

江村備後守親家の土居である。長宗我部第1代能後の三男宗貞が分家して江村を称したとも、江村氏の養子になったとも言われているが詳細は不明である。小籠土居は江村氏が居住したので江村土居ともいった。

吉田備後守重後の二男親家が江村親政の養子になってから江村氏が有名となった。親家は小備後と言われ、「五輪切り」「長浜合戦」など数々の手柄を立て小備後の名が高かったが天正年中に病死したと言われている。その子、孫左衛門家俊が家をついだが慶長の初めに病死した。

天正の頃、西土居の西側、浜田・寅居・シラクサリ・下澤・クニトウ（以上は下崎村）は一段と低く国分川の水を利用して農業が行われたが西土居・土居・熊野丸・南野・馬都賀（以上小籠村）には水がなく草原が多かった。西土居・熊野丸には人家が密集していてその中心が江村氏の小籠土居である。



29. 上野田土居城

上野田詰

後免 13.9×39.1

県道戸板島、後免線の上野田郵便局北方100m の標高22m 内外の平地で水田、神社境内、宅地を含む地域である。

「上野田詰」とされる地点は、東西85m、南北60m の水田である。西辺は東西方向に僅かのレベル差をもってやや高い畠地があり、北辺は詰の水田面とは2~3m のレベル差をもつた土壘状地形を呈している。壠状地形の数は9m で東西方向にのびている。この壠状地形はその北に接して流れる小川の小堤も兼ねたものであるが、城詰とされる水田と接する部分は最も良好な壠状地形を呈している。東方はやや高い水田を隔て大將軍神社に接続するが、神社西辺には南北方向の上盛状地形がある。

城詰の南に接して八幡神社があり、その社地の北部分は東西方向に12m、南北35m の窪地があり壠状の地形も呈している。この窪地とレベル差3m の壠上に八幡神社が所在する。

詰の東南方で八幡神社西側に「三ノ堀」のホノギがある。現状は民家であるが、その間をぬって南北方向に3条の土壠状地形がある。西より50m、40m、50m の長さである。これらの壠状地形と城詰との関係を把握することは困難であるが、そのホノギから土居に関連をもつたものには相違なかろう。東方に「一ノ堀」のホノギがあり、大將軍神社地には「馬場」のホノギもある。周辺には先述の「上野田詰」「三ノ堀」のほか「土居屋式」「上居ノ前」「城ノ前」などのホノギも残り、南方1.2キロには野田土居、東方500m には包末土居、南東2キロには徳弘上居もある。

上野田土居城は岩貞城ともいわれ『十佐国古城略誌』によれば「野田城は上野田大將軍の宮の辺りにあり秦國親の支城也、城主野田甚左衛門、之を監す。野田氏の世系詳かならず。」とあり、野田甚左衛門は野田城主（下野田にあり）であり、上野田城も監していたのではないかと考えられる。

『地検帳』には

上野田詰上下基附

一、廿三代武歩 下ヤシキ

田中市介附

香宗御分

同上二之堀

一、六代四歩 下ヤシキ

七郎みる

同上御分

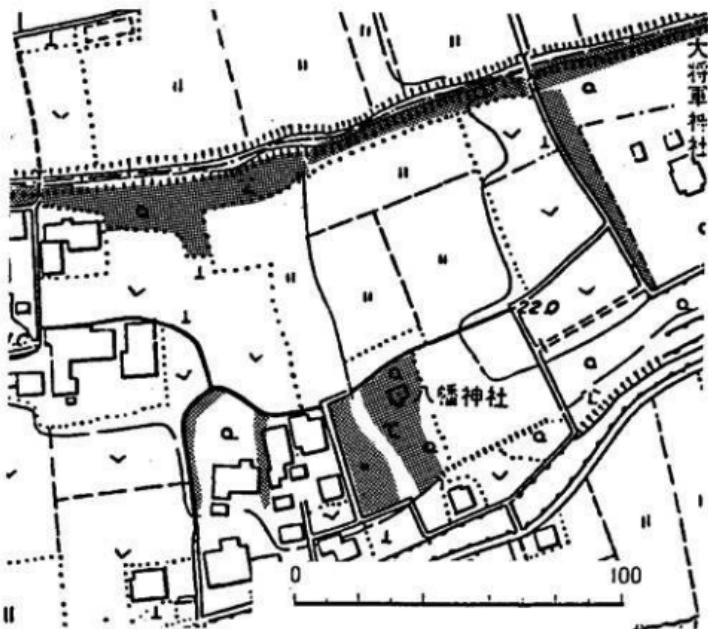
同上

一、給代 出せ代武歩

若丸房ル

同上御分

他数筆が列記されており、検地当時所領は屢々に分割されている。



野田地区



北面及び東面土壘（南西より）



土居周辺



三ノ塙北端（北西より）

30. 包末土居城

包末四方田 後免 15.7×39.1

県道戸板島・後免線沿いの上野田郵便局の東方400m の標高6.8m 内外の平地で、現状は水田である。その水田中に北西隅と北東隅部分に上墾状地形の残丘が所在する。両方ともやや丸味をおびたL字状を呈し、北西隅部分は敷6mで東西25.5m、南北24mの長さをもち南端部はやや規模が小さくなり敷も3.6mとなって次第に消滅する。しかし敷幅のままの狭長地割の水田は更に南に18mのび、丸味をもってゆるく東へ14.5mほど続いている。北東隅部分は敷4.5m程度で一方に比べ相当な丸味をおびて北から南へ50mほど続いている。周辺の水田とのレベル差は1~1.5mであるが、残存状況は北ほど良く、東方はやや低めである。土墾の北中央部分は2m幅で北門の如く切れている。現状地形から土墾に開まれた部分と推定できるのは東西45~50m×南北70m内外である。

西方500mには上野田上居、南西1.2キロには野田土居、東方800mには包地土居、南東1.5キロには立田土居、1.6キロには徳弘土居などがある。

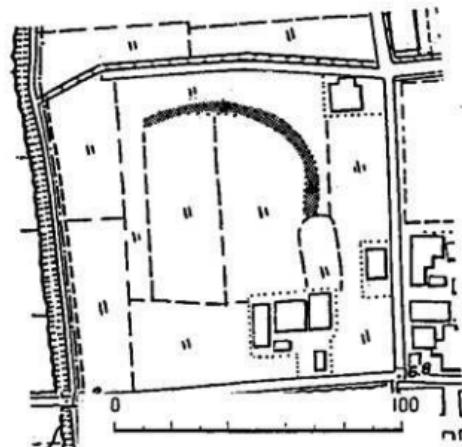
『上佐州郡志』に「在包末村不知何人居城」とあり、築城者及城主等は不明である。『地検帳』によれば、検地当時には次のように給人の居ヤシキとなっている。

刀塙カ内ノ城
一、宅反卅代出廿代三歩
上ヤシキ

包末村主のみ
不死屋九良左衛門給

同じ四方ノ城
一、四反四十宅代五歩ト

同
同じ







北側土壠（北東より）



西南側土壠（南より）

31. 包地土居城（金地城） 金地城ノ丸 後免 18.7×40.3

県道前浜植野線の西方300m、福船郵便局北西400mの標高20mの水田である。現状地形から土居と推定できるものは何も存在しない。周辺水田より僅かに高い地に八幡宮と公民館があり、この地が土塁の一部とも伝えられている。周辺には「城ノ丸」「城ノ後」「ニシノキド」「土器ヤシキ」「土居ノ後」などのホノギもあり、西方700mには包末土居、南東700mには岩村土居、南方1.5キロには徳弘土居、南方1.3キロには立田土居もある。

築城者や存続期間は不明であるが、天正検地の時は所領は給人に分割され、次のように記されている。

包地城ノホリヲシニ所領テ

一・廿五代二歩半 キ

包地村

桑名三良兵衛 紿

中ツヤシキ

一・廿代 千士代

同 主み

依光彦九良給



八幡宮神社付近（南東より）

32. 岩村土居城

福船城ノ内、西ノ内 後免 21.4×40.8

県道前浜植野線沿福船郵便局東方400mの地点に八幡宮の社叢がある。標高21m内外の平地であり、現状は水田でそのなかに北西隅及び東北隅部分と考えられる土壘状地形と、その外側に堀跡を踏襲したと考えられる狭長地形の水田が存在する。八幡宮は西南隅部分である。

現状地形から上塁と考えられる地形は両方ともL字状地形として残存し、北西隅が數6.6mで、南北13.5m、東西23mである。一方東北隅部分は數8mで東西21m、南北13mで消滅するが、これより南については上塁數とほぼ同幅の狭長地割の水田がそのまま南端まで62m続いている。兩隅を中心と北辺のほぼ中央部は16.5mにわたって北門の如く切られている。現状地形から上塁に囲まれた平地と推考される範囲は東西60m、南北100mの広さである。

上塁の外側はそれぞれ土壘に沿った狭長地割の水田が北から東にかけては8.5~10m幅で南限までのび、西辺についても10m幅の同様の狭長地割水田が存在し堀の存在を考えさせる。またこの土壘に沿う狭長地割の外側にいま一つ幅5.5~7mのやや高い狭長地割が存在するが、これも土壘や、堀跡などと何らかの関連がある地形かもしれない。

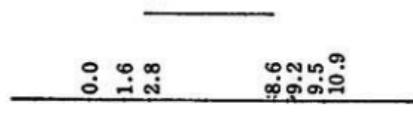
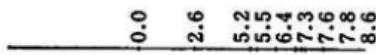
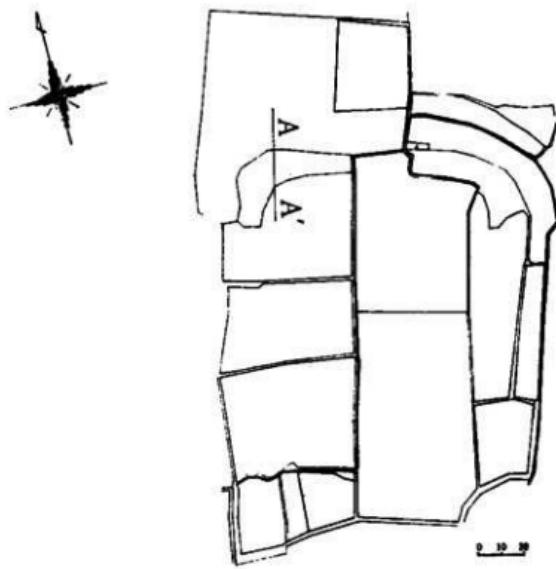
北西700mには包地土居、西方1.4キロには包末土居、南西1.4キロには徳弘土居が、1.1キロには立田土居がある。周辺には「城ノ内」「西ノ内」「城ノ東」「城ノ南」「上居ノ後」などのボノギも所在する。

14世紀頃の岩村氏の居城とされている。建武3年4月26日南北朝の戦において、北朝方に攻撃され城郭は焼き払われたと言う。

『地検帳』によると堀地積を入れて約8反の本城郭と、その西に3反36代の西内付属郭よりなる複郭式である。北中央寄りにある38代の城詰の東に「三ノ堀」その西に「二ノ堀」、その東に「二ノ段」の諸郭があり周囲は塙濠にかこまれていたようである。

周辺の人々の話によれば、堀の東方に通称「茶がし場」という所があり、ここは昔殿様がお茶を飲んで休まれたところと伝えられている。



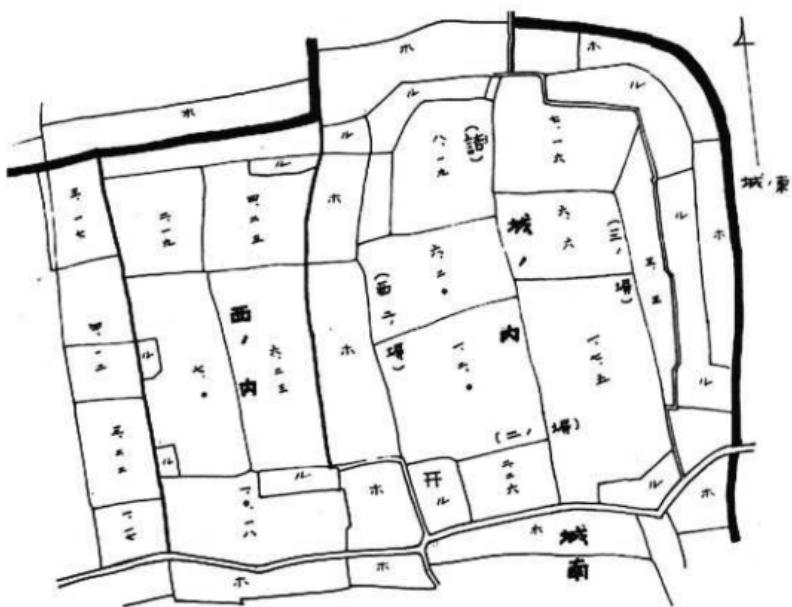


岩村土居詣の測量図

(土佐山田町史より)



詰（西南より）

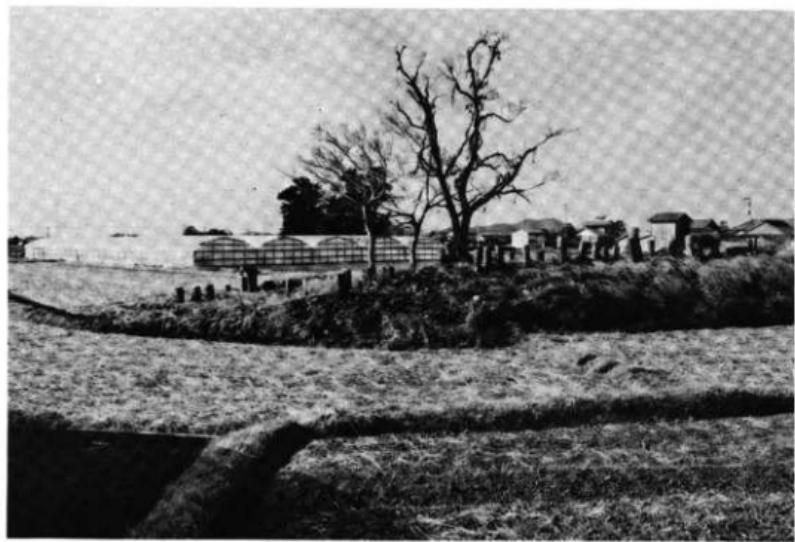


岩村城地籍図

(島田豊寿原図)



北土塁（東より）



北土塁東北隅部（北より）



北土塁と外側狭長地割（東より）



詰東北及び東外側狭長地割（北より）

33. 野田土居城

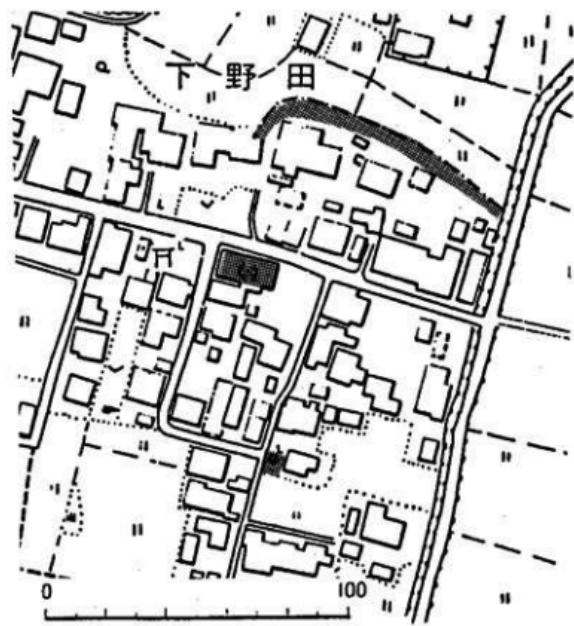
下野田城 後免 13.6×34.4

県道後免野市線の北350m、高知農業高校南東500mの地点で標高13m内外の平地で、民家が密集し、その間に僅かな水田がある。

土居の中心は現在公民館の場所とされ、幅10mで東西に27m、南北12mの小丘があり、その頂部に八幡宮が所在する。この小丘は周辺から削られ現状地形から旧態の推定は不可能である。ここより北方40m地点に、東西方向30mにわたっての壠状地形と、その北に接して堀状の狭長地割の水田が存在する。壠状地形と堀状地形のレベル差は2.5m程度であり、東方になるにつれ低くなる。周辺民家の間には各所にわたって小規模な壠状の残丘や、狭長地割の畑や湿田の深田などが存在するが現状地形からはこの土居の復原は困難である。周辺には「上村土居」「北二ノ堀」「南門」「南二ノ堀」などのホノギもあり、北方1.2kmには上野田土居が、北東1.2キロには包末土居がある。

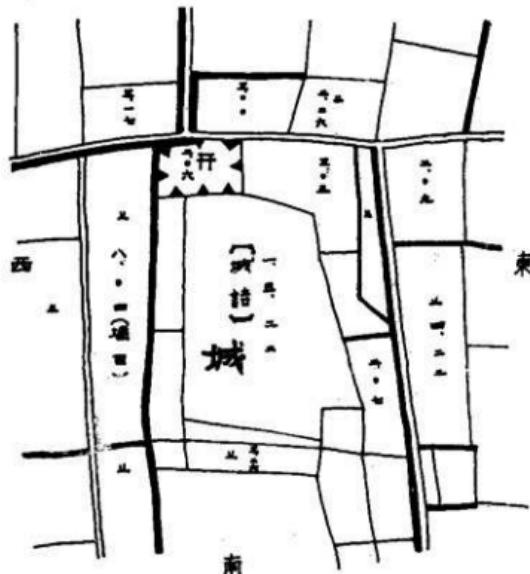
築城年代は不明であるが城主は野田氏であり、長宗我部氏の古い分流である。鎌倉時代の末期、長宗我部6代満幸に5男があり、長子兼光が家をつぎ次子が広井氏、3子が中島氏、4子が大黒氏を創設したという。野田氏は南北朝時代には長宗我部一族として北朝方に属していると推定されるが詳細は不明である。

長宗我部元親の時代には野田甚左衛門が城主であり『地検帳』には、城詰を中心として「西二ノ堀」「北二ノ堀」「東二ノ堀」など16筆が列記されている。城詰の西側は現に「ホリ田」とよばれ、北の外堀はかなり明瞭な堀跡をみせている。「北二ノ堀」の一部は『地検帳』では「御北ヤシキ」とあり、一族の城内屋敷であろう。城中には慈光寺、観音寺があるが野田氏との関係は不明である。甚左衛門は天正3年元親の幡多平定（長宗我部氏と一条氏の戦った渡川合戦）と共に宿毛地方に所領を得て彼の地に移り宿毛甚左衛門といわれた。以後野田城は城割されて分解し、城内は多くの給人の屋敷や給地に変化している。





大藏地区



(島田豊寿原図)



北側壠状地形と外側狭長地割（東より）



北側壠状地形と外側狭長地割東部分（西より）



八幡宮神社（東より）

34. 立田土居城

立田西ノ内 後免 20.0×36.2

35. 徳弘土居城

立田神木内 後免 19.1×34.9

立田土居城は県道前浜・植野線と後免・野市線の交叉点より北東約400m の標高15.5m 内外の水田である。一部土壘状地形も残存するが、近年の整地もなされその壘址上に八幡宮が鎮座する。南西400m には徳弘土居城がある。

立田甚左衛門の土居と伝えられる。旧国人立田氏は在地豪族としてこの地に根をはっていたもので、立田城主として伝えられているものに立田甚左衛門がある。近くに文祿4年没した立田若狭守甚左衛門の墓があるという。甚左衛門の男を傳三郎といい、秦氏滅亡後浪人となつたが、山内家に用いられ幡多郡で7500石の大庄屋に取り立てられた。傳三郎は後年甚右衛門と改名した。その墓は宿毛の東福寺にあり、高さ5尺余の五輪塔が立っているという。

天正検地の時には下記のように所領は再編成されて給地となり長宗我部の家臣となって在地している。

立田ノ上居ソトノホリカケテ裏ヨリ		三合屋
一、拾五代	出井代北多 中ヤシキ	徳久五郎兵衛給
同じ前		主屋
一、三拾代	出井代 中ヤシキ	立田神左衛門給
同じ西		八郎左衛門作
一、三拾代	出井代五歩 上ヤシキ	立田殿分
トコ木ハ次反三拾代ト有		今ハ登井藤左衛門作
一、武反拾九代武歩 中		立田甚左衛門給

徳弘土居城は香南中学校の南接地であり、旧土電安芸線に沿っている。標高15.0m 内外で現状は水田や民家となっている。土居の南限と伝えられる部分に壘状地形が残存し、その頂部に八幡宮が所在する。

徳弘土居城は徳弘氏の土居であるが、天正検地の時には所領は給地となり、徳弘三郎右衛門・徳弘三郎衛門等の宅地や主作田となっている。

徳弘三郎右衛門土居四方土根		
一、武拾三代四歩	上ヤシキ	同三郎衛門居
徳弘土居ノ後		徳弘作
一、拾代	出六代四歩 上	五郎殿給

一、式拾代 上

徳弘三郎右衛門給

徳弘氏は菅家の支族といわれた上佐の国に来て立田の庄に居たが、功があり城主となった。そして主家の菅公及観音像を安置して祀ったのが、立田天満宮の始りであるという。天満宮は徳弘城跡内にある。

城主徳弘三郎左衛門は、はじめ山田氏に仕え、後長宗我部氏に属している。墓は下川原三味墓地というところにあり、寛永元年（1624）に没している。





立田土居城周辺（南西より）



徳弘土居城星状知形（東より）

36. 八木土居城

大壩城 後免 14.8×28.2

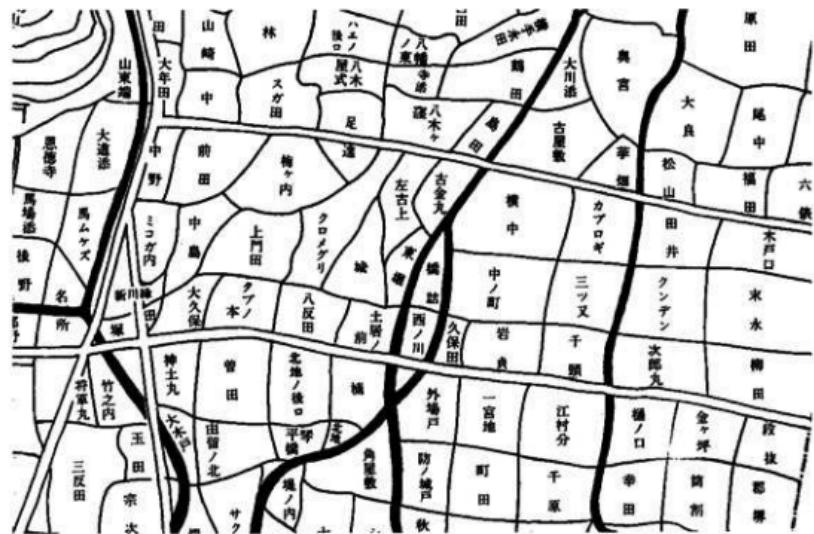
県道浜改田後免線の東400m、南国バイパス南400mの地点で、標高10m内外の平地であり、現状は水田、畑地、宅地となっている。周辺には一部水田中にL字状の周辺部よりやや高い壠状地形もあり、またそこより北方30m地点にもかつてはL字状の壠状地形が存在したと伝



えられる地点もあるが、現状地形から土居跡を推考することは全く不可能である。周辺には「城」「東堀」「土居ノ前」などのホノギはある。

岡豊城の出城であったと伝えられ、戦国時代の城主は八木八郎左衛門といわれる。「土佐日記」に出てくる「やぎのやすのり」との関係については不明である。

現在城跡の北方300mに八木八幡宮がある。





八木附近の地籍図
不整形の複郭式平城（島田豊寿原図）



八木城周辺（南より）